

明治学院バッハ・アカデミー会報 (第5号)

巻頭言

芸術監督 樋口 隆一

2016年度の活動を振り返ると、それは「芸術的成功と、経済的打撃」という一言に尽きます。前号で触れたように、前年度の最後を飾る3月20日、サントリーホールでの《マタイ受難曲》演奏会は大成功で、5月に発売された雑誌『音楽の友』6月号のRondo欄では、「J.S.バッハの人間存在への信頼に寄り添って」と題した池田卓夫氏の名文が、その演奏の本質をみごとに描写して下さいました。

2016年度の演奏会は、本来ならば秋にしたかったのですが、サントリーホールが2017年度前半に改修閉館を予定しているために、秋のシーズンには会場が確保できず、急遽、6月21日(火)に、フォーレの《レクイエム》を中心とした演奏会を開催することとなりました。するとふたたび『音楽の友』9月号のRondo欄で、萩谷由喜子氏が『明治学院バッハ・アカデミー』の底力」という力のあるもった贅辞を寄せて下さるほどの充実した演奏会となりました。しかし、平日であったこと、また合唱とオルガン、管弦楽による日本ではかなりユニークなプログラムであったこともあって、集客ははかばかしくなく、合唱団は経済的に大きな打撃をこうむることになりました。これは当団にとって初めての興行的失敗と言えます。この点で、皆様には心からお詫び申し上げねばなりません。これまでの演奏会が、興行的にも至極順調であったこともあり、関係者全員が無意識のうちに楽観的になっていたこともありました。よい反省の材料となりました。

しかし、芸術的には驚くべき大成功であったこともまた事実です。私たちは、2008年と2009年には「アンナ・マクダレーナ・バッハが愛した夫——J.S.バッハ」、2011年と2012年には「ウィーン音楽散歩」と題したオルガンレクチャーコンサートを通じて、サントリーホールのリーガー製大オルガンを使った演奏会の経験を積んできました。そこで今回は、フォーレの《レクイエム》を上演するにあたり、「J.S.バッハ」のときのパートナーだった椎名雄一郎さんをオルガニスト、さらにオーケストラとしては、白石ホワイトキューブでのジョイントコンサートで協力関係を重ねてきたN響団友オーケストラをお迎えしてユニークなプログラミングに成功しました。私の頭の中では、ヨーロッパの大聖堂における豪華な演奏会をイメージしていたのです。



2016.6.21 フォーレ 「レクイエム」演奏会 リハーサル

冒頭に演奏したプーランクの《オルガン、ティンパニと弦楽合奏のための協奏曲》は、ドイツ留学中の若き日の私が、チュービンゲン大学管弦楽団と合唱団のヴェネツィア演奏旅行で、聖マルコ大聖堂で体験した感動を再現するものでもありました。そしてモーツァルトの《ハフナー交響曲》と《ミサ曲 変ロ長調》とで前半が終わり、休憩を挟んでの後半は、椎名さんのオルガン独奏によるプーランクの《コ

ラール第3番》とフォーレの《レクイエム》で、サントリーホールはさながらパリのカテドラルのような音楽が満ちたのです。光野孝子さんの「ピエ・イエズ」、河野克典さんの「リベラ・メ」の名唱も忘れがたいものとなりました。モーツァルトのミサ曲でもこのおふたりの名歌手と並んで、松本明子(Ms)、伊田明弘(T)の2人の合唱団員が立派にソロを務めてくれました。

秋のシーズンも多彩でした。11月19日(土)、白石ホワイトキューブでのジョイントコンサートでは、まず佐々木隆行さんの指揮で佐藤眞作曲の混声合唱のための組曲「蔵王」を歌い、演奏会後半は樋口指揮N響団友オーケストラによるバッハの《ブランデンブルク協奏曲第4番ト長調》BWV1049、さらにバッハの《ミサ曲イ長調》BWV234という豪華なプログラムでした。長らくN響の首席奏者を務められた小出信也さんによる素晴らしいフルートの音色が印象的でした。定員600席のホールはほとんど満席に近く、2013年1月以来、5回にわたって積み重ねてきた白石キューブ合唱団とのジョイントコンサートの努力が実った演奏会となりました。

それからわずか1週間後の11月26日(土)には、恒例のチャレンジコミュニティー大学特別演奏会が、明治学院大学アートホールで開催されました。樋口のレクチャーを交えたこの演奏会の前半は、バッハのモテット第3番《イエス、わが喜び》、そして後半は白石と同じくバッハの《ミサ曲イ長調》BWV234でしたが、ここでは栗島和子さんのオルガン伴奏で上演されました。ミサ曲のソリストはどちらの演奏会も、光野孝子(S)、林田素子(A)、伊田明弘(T)、高槻靖(B)という陣容で、光野さん以外は全員合唱団員ながら、見事な歌唱を聴かせてくれたのは嬉しいことでした。

12月23日(金)には恒例の「明治学院クリスマス音楽礼拝」がチャペルで行われ、私たちは讃美歌のほか、バッハの《クリスマス・オラトリオ》から第1部の最後を飾る第9曲のコラール「ああ、最愛のイエス様」とヘンデルの《ハレルヤ》を歌わせていただき、心をひとつとしてクリスマスを祝うことができました。

サントリーホールで行われた2回の演奏会から、2種類のCDが制作されたことは、2016年度の大きな収穫と言えます。



マタイ受難曲CD molto fine MF22312-14

まず、3月20日のバッハ《マタイ受難曲》後期稿は、ながらく当団の演奏会の録音を担当しているエヌ・アンド・エフ社のmolto fine(モルト・フィーネ)レーベルとして、ユニバーサルミュージックIMSから2016年11月に発売されました。3枚組のCDには、歌詞対訳も含めて60頁にもおよぶ充実したブックレットが添えられ、各方面から多くの賛辞が寄せられたことはありがたいかぎりです。雑誌『レコード芸術』1月号、雑誌『あんさんぶる』の批評のほか、高名な編集者の大原哲夫さんからはすばらしいエッセイもいただき、合唱団のホームページとfacebookページに掲載させていただくことができました。

2017年2月22日には、フォーレの《レクイエム》が、オクタヴィア・レコードから発売されました。これもまた非常に満足のいく録音なので、各方面からの反響が楽しみです。

2017年度は10月9日(月・祝)サントリーホールにおける、ベートーヴェンの大作《ミサ・ソレムニス》作品123演奏会が楽しみであり、同時に乗り越えるべき大きな課題でもあります。私たちはすでに周知な合唱練習を開始しており、それは毎回、ベートーヴェンが自ら最高傑作と呼んだこの特別な作品の素晴らしさに感動を新たにすることもできます。しかしながら、これといった財政基盤を持たない合唱団が、今後活動を続けていけるかどうか、大きな不安を抱えての船出でもあります。



フォーレCD EX-TON OVCL-00617

幸い、学校法人明治学院からは「明治学院バッハ・アカデミー」という名称使用の許可を、新たに2019年度までの期限付きでいただくことができました。それまでの3年間、なんとか活動を続けられればと願っております。維持会を始め各方面のご支援を切にお願い申し上げます。



樋口隆一の「マタイ受難曲」を聴く

大原 哲夫（編集者）

昨年亡くなった友人の画家・堀越千秋はカンテの歌手としてもスペインで絶賛されるほどであったが、彼のアトリエにはマタイのカセットテープがあった。創作に行き詰ると彼は安物のラジカセでマタイを聴いた。武満徹は作曲にとりかかる時、必ずマタイのコラールの一節をピアノで弾いてから譜面に向かった。かようにバッハのマタイ受難曲は特別な曲である。

創作とは無から有を生むことである。それは己と向かい合うこと、己自身を問い直すことでもある。自然や神、大いなるものと対話することにもなる。

夕日が海に落ちてくるあの素晴らしい光景。松林にざわめく風の音。今まで出会った数多くの風景、生きて今まで知り合った多くの人々。そして、ここにいる私は一体何者のか。広い宇宙に、今ここに存在している私は一体誰なのか。

昨年、バッハ・コレギウムの鈴木雅明指揮のマタイ、続けてサントリーホールで樋口隆一指揮のマタイを聴いた。近年のマタイの演奏はドラマツルギーとしてのキリストの受難を劇的に演奏するものが多い。バッハ・コレギウムのマタイの演奏は、聴衆もまたキリストとともにいるイエスの弟子の1人となってしまふほど迫真の表現である。それを悪いとは言わぬが、目の前で演じられる劇的な演奏が素晴らしければ素晴らしいほど、目も耳も舞台に釘付けとなり、マタイを聴きながら、自らを省みる機会が失われるという皮肉な結果になる。樋口隆一の指揮するマタイはその対極にあった。久しぶりに心が穏やかに、大いなるもの前の小さな己の存在を気づかせてくれる心休まる演奏だった。特にコラールが素晴らしい。素晴らしいと言うのは、これは技術的にうまいと言うのではない。バッハの無伴奏チェロ組曲を終生の友としたチェリスト青木十良はアンサンブルとは一致することではなく、調和することであると云ったが、ここで演奏されたコラールは、アマチュアの合唱団であるから、当然、技術的にはうまいわけではないのかもしれないが、いたずらに完璧さを求めたものではなく、合唱団のそれぞれの思いが見事にブレンドされ、心地よい調和をたもっていた。心のこもった歌声だった。エヴァンゲリストは70

歳を迎えており、そのことで最盛期の声が失われたなど批評家は言うが、そんなことはない。見事な味を出している。声楽家は最盛期の、声量が豊かな時がいいと言うならば、円熟した歌舞伎役者や古今亭志ん生の落語を若い時のほうがいうのと同じである。音楽にも味が大事なのである。若ければいい、声が出ればいいと言うものではない。

樋口隆一の指揮も見逃せない。彼は音楽を支配しない。音楽に身を任せる。合唱団のメンバーは「樋口先生の指揮はよく見ていないと、どこから始まるかわからない」と愛すべき悪口を言うが、フルトヴェングラーの棒だってよく見てないとどこで始まるかわからなかったそうだ。近衛秀麿も同様だったようで、だから近衛秀麿は「ふると面食らう」と言われた。

そういう意味では樋口隆一の指揮はフルトヴェングラーや近衛秀麿の系列に連なる。音楽を楽譜の縦の線に合わせるのではなく、行く川の流が常に横にたゆたうように、指揮者は音の川の流に身を任せる。舞台で見ているとよくわかるのだが、縦に刻むのではない。指揮者樋口隆一の体は常に左右にたゆたう。少しも音楽の邪魔をしない。聴衆はマタイと言う大きな川の流の両岸に展開する様々な風景、様々な出来事の中に身を置き、省みて己を振り返る、そんな機会を与えてくれる演奏だった。



2016.3.20 マタイ受難曲演奏会(写真:三浦興一)

ファイン・N&Fの西脇義訓、福井末憲の二人は、サントリーホールで演奏された、この樋口隆一指揮のマタイ受難曲をライブ録音した。そのCDが出来上がり、わが家に送られてきたのだが、実に自然に当日の様子を録音している。いたずらな誇張はない。空間に広がる合唱団のメンバー一人ひとりの思いや、ソプラノ、アルト、テノール、バスの独唱者たちの、真摯な音楽に対する思いまでもマイクを通して拾い上げ、オーケストラのメンバーたちの決して完璧ではないが実に心地の良い響きを捉えている。

私はマタイ受難曲の新譜が出たという昔から必ずLPレコードのセットを買っていた。十数組はあるだろうか。私のマタイコレクションの中でもこれは折に触れて聴きたくなるマタイである。

ゴーギャンは言った。「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」と。

(2017.1.22 記)



<フォーレ演奏会に参加して>

横山 聡 (合唱団バス)

フォーレの《レクイエム》を「体験したい」。

そう願っていたのは、今から10年ほど前から和声学、音楽分析を改めて勉強しだして一段落した頃、フォーレの歌曲を何曲か和声分析などをやった頃だったろうか。フォーレの旋法的な流とそれを絶妙に支える異名同音を駆使した転調、何よりかの「フォーレ終止」。しかし和声分析の場では、ピアノという平均律に縛られた響きであって、合唱の織りなす純粋な響きに憧れながらも、そこから自由になった響きは想像の世界にとどまっていた。自分では日頃偉そうに「音楽は録音で聴くことは音楽受容の一部に過ぎず、自らが音のひびく場を『体験』をしてこそである」と望んではいても、日常の仕事の世界からはそんな贅沢なことは夢のまた夢であった。

2016年の春、復活祭に合わせてのバッハの《マタイ》の東京の演奏では、明治学院バッハ・アカデミーの演奏が一番良かった、と演奏会スズメたちがささやいていた。自分では同時期のライブツィッヒの合唱団での演奏会に合点がいかなかったところ、そんなことならば行けば良かったなあ、と縁あってfacebookで「友達」の樋口隆一先生にその旨をお送りした。すると、何と今度は《レクイエム》をやるという。ワオ。

練習の見学だけでもさせていただけませんか、と図々しくも切り出すと、「ああどうぞ見学だけでもできますから、いらっしゃいな」とのお言葉。それに甘えて、ノコノコ出かけたのが3月28日のサントリーに向けての初練習だった。



明治学院記念館(練習会場)

物見遊山気分が高輪台まで行くと、古い洋館づくりの練習場にまず驚き、場違いなところに迷い込んだか、と気づくもすでに遅しで練習が始まる。《レクイエム》出だしのd-mollのオルガンによる主和音が、高い天井の広い空間に柔らかく広がってゆく。そして静々と始まる

「Requiem」の歌、バスがC音を経てB音の上ののる堂々としたオルガンと歌声、特に4度の澄んだ響きは、あっという間に心をを虜にした。

その日の練習2時間が夢のように終わり、樋口先生にお礼のご挨拶にうかがうと、こんな感じでやってますよ良いでしょうか？と和かにお返しいただく。すでに心はこの響きを側で聴くだけでなく「体験」したい、参加したい、と先走る。

実は合唱なるものは中学3年以来であるし、カラオケをやらないので、発声も何もあったものではない。でも、そんなことは吹き飛ばす魅力があつた練習場には満ちていた。

しかし当然のことながら、そこから先の道のりは甘いものではない。提供されていた音取りのmidiのファイルを聴いても、今一つ音が取れない、音程が取れても慣れないラテン語の歌詞がつくと全滅の模様。加えてのモーツァルト《ミサ・ブレヴィス》はテンポも速く、歌詞だけを口にするだけでロレツが回らず、八方ふさがりの状況である。平日の休憩時間はラテン語の早口言葉の練習、仕事が終わると

貸しスタジオにこもって、ヴォーカル・スコアを弾きながらの音取り練習と、大学卒業時の国家試験以来の息の詰まるような日々を過ごす。そうやってみたものの、春の連休も終わった頃、パートを決めるために光野孝子先生による1階でのオーディションではグズグズの状態であった。さぞご心配をおかけしたと察する。皆様にご迷惑をおかけしないで済むか、と何とか思えたのは、やっと6月に入ってからのことであった。

そしてあっという間の演奏会当日。ゲネプロで舞台に立つ。ほう、案外客席は近く見えるものだと思ううちに、始まったモーツァルト。冒頭「Kyrie eleison」の「-son」の響きが会場に広がってゆくのが目に見えるよう。ああこれだけでも、この場を「体験」できた自分は何と幸せだ、と感じ入った時だった。

こういった「体験」は一人ではできない。多くの人達との出会い、そして奇遇で可能になったことである。フラフラと入ってきた者を受け入れてくださった合唱団の皆様、ことさら皆川公一様には、練習の列の前に出て歌う方が上達するから、と背中を押して下さったこと、高槻靖様には、調子外れに他のパートを歌っているのをやんわりと諭して下さったこと、特にお礼を申し上げます。そして樋口先生には、万感の感謝を改めていたしますとともに、この秋の《ミサ・ソレムニス》に向かつての皆様のご活躍にも期待申し上げます。



これからの演奏会のお知らせ

バッハ・アカデミーの今後の活動予定です。詳細が決まる都度ホームページやfacebookにてご案内してまいります。皆様ぜひお誘い合わせの上お越しく下さい。

<ベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」演奏会>

日時：2017年10月9日(月・祝)
場所：サントリーホール 大ホール
指揮：樋口 隆一
曲目：L.v. ベートーヴェン：ミサ・ソレムニス Op.123
合唱：明治学院バッハ・アカデミー合唱団
合奏：明治学院バッハ・アカデミー合奏団

<白石キューブ合唱団とのジョイントコンサート(第6回:キューブ合唱団結成20周年記念)>

日時：2017年12月2日(土) 16:00開演(予定)
場所：白石ホワイトキューブ(宮城県白石市)
指揮：佐々木隆行、樋口隆一
曲目：千原英喜作曲 宮澤賢治作詞：組曲《雨ニモマケズ》より
モーツァルト:ミサ曲ハ長調《戴冠ミサ曲》K.317 他

<J.S. バッハ カンタータ演奏会>

日時：2018年6月2日(土) 17:00開演(予定)
場所：紀尾井ホール
指揮：樋口隆一

曲目： J.S. バッハの教会カンタータ（樋口先生校訂の新バッハ全集第1編第34巻からの選曲を中心に） 他



CD 発売のお知らせ

タワーレコード、HMV、TSUTAYA など全国レコード店、および Amazon などネット通販にて好評発売中です。

J.S. バッハ作曲 マタイ受難曲 BWV244 (1736 年後期稿)

2016 年 3 月 20 日 サントリーホール ライブ録音

2016 年 11 月 20 日 molto fine レーベルより発売

CD3 枚組 対訳・ライナーノート ブックレット付 (全 60 ページ)

樋口隆一「私のバッハ遍歴《マタイ受難曲》」

定価 4,000 円 (税抜き)

指揮 樋口隆一

ジョン・エルウィス(T:福音史家・アリア)、河野克典(B:イエス)、光野孝子(S)、永島陽子(MS)、土田悠平(Br)

合奏 明治学院バッハ・アカデミー合奏団

合唱 明治学院バッハ・アカデミー合唱団、明治学院高校ハイグリー部

G. フォーレ作曲 レクイエム ニ短調 作品 48

2016 年 6 月 21 日 サントリーホール ライブ録音

2017 年 2 月 22 日 Exton レーベルより発売

対訳・ライナーノート ブックレット付 (全 16 ページ)

定価 2,700 円 (税抜き)

指揮 樋口隆一

光野孝子(S)、河野克典(Br)、椎名雄一郎(オルガン)

合奏 N 響団友オーケストラ

合唱 明治学院バッハ・アカデミー合唱団



バッハ・アカデミー維持会 第5期募集！

明治学院バッハ・アカデミー(2000年創立)は、2010年3月、第1期の活動を終わりました。しかしその後もサントリーホール「ウィーン音楽散歩I・II」出演をはじめ活動の場を広げ、2013年11月にはベルリン・コンツェルトハウス、ブリュッセル王室礼拝堂への海外公演を行うなど、さらなる発展を遂げております。これらの活動を支援するため「明治学院バッハ・アカデミー維持会」が設立され、財政面でのバックアップを行っています。

お陰様で、2014年10月のサントリーホールにおけるバッハの《ミサ曲ニ短調》演奏会に続き、2016

年3月の《マタイ受難曲》公演、同年6月の《フォーレ「レクイエム」》公演と活動を継続して参りましたが、これもひとえに皆様のご支援の賜物でした。ただし、巻頭言にありますように合唱団の財政状態としては厳しい状態に追い込まれており、今後も実りある活動を続けていくためには皆様のさらなるご支援が欠かせません。

バッハ・アカデミー維持会は、本年度もサントリーホールにおけるベートヴェン「ミサ・ソレムニス」演奏会への支援を行います。皆様におかれましては 今年度の維持会員として是非ご参加いただき、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

維持会員の特典

- 1 主催公演の特別ご招待： 第5期は、2017年10月9日(火)夜にサントリーホールで開催される、ベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」演奏会の特別指定席をご招待いたします。また、本公演のチケットを維持会員特別価格にてご購入いただけます。
- 2 主催公演後の懇親会(指揮者、ソリスト他出席)にご参加いただけます。(会費別途)
- 3 演奏会・講演会のご案内。
- 4 活動報告等のご送付。

維持会年会費(2017年4月～2018年3月)

個人会員： 1口 10,000 円

特別会員(法人等)： 1口 100,000 円

ご入会のお申込み

下記ホームページの「維持会」ページに添付してありますお申込書にご記入の上、申込書記載の事務局住所に郵送又は e-mail 添付にてお申込みください。



バッハ・アカデミー合唱団 団員募集！

バッハ・アカデミーでは、合唱団メンバーを各パート若干名ずつ募集しています。バッハやバロック音楽、教会音楽に興味をお持ちの方は、ぜひ一緒に歌いませんか。合唱経験があり練習に熱心に参加して頂ける方であれば、所属団体・出身校などにかかわらずどなたでもご参加いただけます。

明治学院白金キャンパスの、東京都港区「有形文化財」「景観上重要な歴史的建造物等」に指定されている伝統ある記念館の会議室にて、毎週月曜の夜に楽しく厳しい練習を重ねています。

随時見学も受け付けています。練習場所は、学校行事(学会、試験、文化祭)などにより変更になる場合がありますので、ご希望の方は事前に下記ホームページよりご連絡ください。

バッハ・アカデミー ホームページ: <http://bachakademie.web.fc2.com/> (2016年にアドレス変更しました)

facebook ページ: <https://www.facebook.com/明治学院バッハアカデミー合唱団-973803896015459/>

明治学院バッハ・アカデミー維持会報 第5号 2017年3月26日発行